

## 中国における牧口常三郎著 『人生地理学』の所蔵者について

高橋 強

1. はじめに
2. 『最新人生地理学』（中国語版）の所蔵者
  - (1) 徐家滙天主堂蔵書楼
  - (2) 章厥生
  - (3) 陳子褒
3. 『人生地理学』（中国語版）の所蔵者
  - (1) 河南留学欧美預備学校
4. 『人生地理学』（日本語版）の所蔵者
  - (1) 両江法政学堂
  - (2) 胡小石
5. むすびに

### 1. はじめに

牧口常三郎（1871-1944）は1903年10月15日、『人生地理学』を世に問うた。その後、翌年から1907年まで、東京の弘文学院で「人生地理学」を講義した。弘文学院は1902年に、当時、東京高等師範学校の校長を務めていた嘉納治五郎によって創立された中国人留学生のための学校であった。

清朝政府は、日清戦争（1894年）や義和団事件（1900年）等を通し、新し

い政策を実行するための人材養成の必要性を痛感し、明治維新を成功させ近代国家へと発展を遂げている日本を学ばせる為に、多くの留学生を派遣した。その数は最盛期の1906年には1万人を超えていた。弘文学院は当時の代表的な留学生教育機関であった。

牧口常三郎の『人生地理学』は、たちまちにして中国人留学生の注目を集めるところとなった。現在その中国語訳が4種類も発見されている。

#### (1) 「浙江潮」記載の『人生地理学』

雑誌「浙江潮」は、1903年に浙江省出身の留学生が日本で発刊したもので、その第9期(同年11月8日)と第10期(12月8日)にそれぞれ、『人生地理学』の部分訳が掲載されている。第9期には、黄孫「植物与人生之関係」(『人生地理学』「植物」)が、また第10期には黄孫「植物与人生之関係」(続)と壮夫「地人学」(『人生地理学』「海洋」)がある。

同誌は中国の革命を宣伝し、新知識を伝播させた雑誌で、発行部数も多く(第8期は5000部)、中国国内外で青年や学生に強い影響力があった。

#### (2) 『江蘇師範講義 地理』

同書は1906年に江蘇師範生が編集し、日本で印刷され中国で発売されたものである。その「序」のなかに、「人生地理学日本牧口常三郎講義」「教科書の用に備える」等の記載があることから、江蘇省出身の師範生が弘文学院で牧口常三郎の講義を受け、その内容を編集したものと考えられる。同書は、主として蘇州や南京の師範学校で教科書として使われた。

#### (3) 『最新人生地理学』

同書は1907年に、青島に住所を置く「世界語言文字研究会」が翻訳し、上海の発行者が日本で印刷して、中国で発売したものである。内容は同書の全訳で、カラーの地図まで全く同じである。同書は1907年7月に初版が、10月には再版が出版されている。

現在、同書は10冊の所在が確認されている。北京師範大学、蘇州大学、復

旦大学、中山大学の各図書館、天津図書館、南京図書館、浙江省立図書館に各1冊、上海図書館に3冊である。

#### （4）『人生地理学』

同書は、凌廷輝により翻訳編集され、1909年に上海新学会から出版された。凌廷輝はかつて弘文学院に学び、帰国後は出身地の浙江兩級師範学堂等で歴史や地理を教えた。

牧口常三郎の『人生地理学』は、日本に留学していた中国人学生の翻訳等によって、その後中国各地に紹介された。彼らから注目を集めていたということから、中国でも大きな関心を向けられたことは想像に難くない。『最新人生地理学』などは3か月後には再版もなされている。かなり好評であったことがわかる。『人生地理学』がどのように受容されていったのかは、大変に興味ある内容であるが、現在それを知る手立てはない。本稿は、同書に留められている所蔵印から判明する所蔵者（機関も含めて）を通して、その受容の一端を検証することが目的である。

所蔵印が発見されたのは、上海図書館、浙江省立図書館および中山大学図書館で所在が確認された『最新人生地理学』と、河南大学図書館で所在が確認された『人生地理学』である。なお所蔵印は、『人生地理学』の中国語版からばかりでなく、日本語版からも発見されている。現在、日本語版（1906年版）は南京大学図書館と厦門大学図書館で所在が確認されている。所蔵印が発見されたのは、前者図書館のものである。

## 2. 『最新人生地理学』（中国語版）の所蔵者

### （1）徐家滙天主堂蔵書楼

『最新人生地理学』（1907年再版）：上海図書館所蔵。「徐家滙天主堂蔵書楼印」という印の跡がある。徐家滙天主堂とは19世紀に建てられた教会で、同

天主堂付設の蔵書楼（図書館）には古い中国語の書籍もありその1冊として収蔵された。<sup>(1)</sup>

1847年、耶蘇会修道院が徐家滙に移ってきた後に、蔵書活動が開始され蔵書楼は1867年からその建築が始まった。1920年代末前後に徐光啓の末裔・徐允希、徐宗沢が蔵書楼の主任を務めたころ大きく発展をした。彼らは、西洋の文化や科学技術を中国に伝播させる際に、大きな役割を果たした。

中国語関係の蔵書には、伝統的な「四書五経」も含まれているが、最も多いのが中国の各省、府州、県の地方志である。1930年代には地方志だけで2700種類に達している。これ以外にも、創刊当初からの刊行物や新聞の収蔵も大きな特色で、発行期間が最長の英字新聞「字林西報」や、中国近代に最長の発行期間を持つ中国語新聞「申報」等がある。西洋の古典蔵書に関して言うと、神学関係の文献が中心でそれに関する漢学資料もある。蔵書の言語も、ヘブライ語、ラテン語、ギリシャ語等20種類に及ぶ。

地方志を多く収蔵したのは、中華文化を保存する目的であったが、一方においては宣教師の布教の為でもあった。徐宗沢は「宣教師はどのように中国地方志に注目したか」の文章の中で次のように述べている。「天主教は文化の宣伝者である。文化の使命は宣教師が負うものであり、文化の種類は、時や場所によって必要に応じて選択するものである。我国の地方志は、歴史上特種な書籍で、特殊な価値を有し、研究の必要性がある。この研究活動はまた宣教師の手中にあり、皆これを成しうる」と。宣教師はこのようにして、「西学東漸（西洋の学問が中国に伝わる）」を進める中で「東学西漸（中国の学問が西洋に伝わる）」の役割も果たした。そして蔵書楼はこのような状況の中で、中国と西洋を結ぶ文化交流の役割を果たしてきた。

1956年、上海図書館が管理することになり、現在は上海図書館の一部分となっている。現在蔵書は100余万冊、新聞は約3600種類である。<sup>(2)</sup>

## （2）章厥生

『最新人生地理学』（1907年初版）：浙江省立図書館所蔵。「章欽」「Chang Kin」「章厥生教授遺書損贈浙江省立図書館」の印の跡がある。更に「此語過火（この語は度を超えている）」、「此数句意思重複（これらの言葉は意味が重複している）」等（この他3か所の書き込みがあるが、解説が困難である。その内1か所は文章の上に線が引かれている）の書き込みがあり、更に最初から最後まで至る所に「○」「△」の符合が付され、かなり精読した跡が見られる。

章欽（1880-1931）の字は厥生であるので、同一人物であると考えてよいだろう。章欽は1903年に科挙の試験に合格し、浙江高等学堂、浙江兩級師範学校で教授を務め、1913年からは北京高等師範学校、北京大学、北京師範大学、南京東南大学で文学部、歴史学部の学部長を歴任した。著作に『歴史地理大辞典』、『中華通史』、『中国文化史』等がある。歴史学等の書籍は、遺族が浙江省立図書館に寄贈した。『歴史地理大辞典』の「凡例」には「本書は中国国内外の各種図書700冊から800冊を資料とし、丹念に読み云々<sup>(3)</sup>」とある。『最新人生地理学』もその中の1冊かもしれない。<sup>(4)</sup>

## （3）陳子褒

『最新人生地理学』（1907年初版）：中山大学図書館所蔵。同書の1頁目に「嶺南大学図書館蔵」と「子褒」という印が発見され、元々の所蔵者は陳子褒であったことが判明した。陳子褒（1862-1922、広東新会出身）は、清末民国初期の教育家で、近代化教育の先駆者の一人であり、当時「東洋のペスタロッチ」と称された<sup>(5)</sup>。中国の近代基礎教育の改革と発展を推進する際、特に広東、香港、マカオ地区の基礎教育において大きな貢献を残した。陳子褒は早くから西学（西洋の学問）に触れていた。1893年に康有為らと郷試に臨み、成績は康有為よりも上であったが、康有為の経国救民思想に感銘し康有

為を師と仰ぐようになった。その後「公車上書」に参加し、康有為が組織した「強学会」に入り維新思想を宣揚した。そのころ、陳子褒はすでに婦女、児童に適応した啓蒙教育の必要性から、『婦孺須知』という書物を著わし、その後も『婦孺浅解』、『婦孺八勸』、『婦孺入門書』、『幼雅』等を著わした。

1898年、「百日維新」が失敗した後、陳子褒は日本に渡り、神戸に着いた。当時『東亜報』社の主任を務めていた韓文挙の紹介で、同報の編集長橋本海関と知り合った。橋本は日本の著名な教育者で、詩人でもあった。橋本の紹介で、陳子褒は日本各地の小学校を参観し、小学校の教学方法を視察することができた。陳子褒は、その中で福澤諭吉の創設した慶応義塾の教育主旨や教学方法を称賛した。

1899年1月に帰国したが、日本での視察は陳子褒の後半生に、大きな変化をもたらした。教育思想ばかりでなく、中国社会に対する見方において、特に教育と強国や社会発展の内在的関係については、“救国はまさに教育にある”、“教育の根本はすべて婦女、児童にある”との見方を堅持するようになった。

1899年、陳子褒はマカオに「蒙学書塾」、「灌根草堂」、「子褒学校」等を創立し、“婦孺の教育”事業を開始した。同年、中山、新会、台山等の小学校教師と共に「教育学会」を組織した。陳子褒は『教育学会縁起』の中で“一国の強弱は人材にあり、人材の盛衰は教育にある”、“中国の教育は、その根本を失ってしまったので、全面的な改革がなければ、国民の士気を起こし、国民の智慧を引き出せない”、“(将来を見通している識者は)中国の滅亡を述べるが、その滅亡は識者の手中にある、これは間違いはない”等を述べている。

1900年、陳子褒は『教育説略』、『婦孺三字書』、『婦孺四字書』、『婦孺五字書』、『婦孺新読本』、『婦孺論説入門』、『婦孺女兒三字書』等の系列の教材を出版し、教育実践に用いた。その後の7年あまりの間に、陳子褒は精力的に

啓蒙教科書を編集し、多くの教材を出版した。例えば、『婦孺学約』、『婦孺論説大観』、『婦孺論説階梯』、『婦孺中国与地略』、『婦孺解詞粵語解』、『婦孺訳文』、『婦孺信札材料』、『婦孺閑談』、『婦孺中国史問題』、『幼学文法教科書』等。1903年、陳子褒は「灌根学塾」を主宰し、初めて女子生徒を受け入れ、中国における男女共学の発端となった。その翌年、『婦孺報』、『婦孺雜誌』、『灌根年報』を編集し発刊している。1909年には「蒙学会」を組織し、同会の初代会長を務めている。1912年から1917年にかけて、『左伝小識』、『補読史論略』、『史記小識』、『前後漢書小識』、『晋書小識』等の歴史関係の教材を出版し、また『灌根小学雜誌』も刊行した。陳子褒の教育理念の中からは、広い史学と人文の視点が見出され、その時代の創新意識も垣間見ることができると言える。

嶺南学堂（嶺南大学の前身）がマカオに避難していた際、陳子褒の「蒙学書塾」に隣接した。当時、同学堂の学長は毎年夏に、陳子褒に国文の講習班で講義をしてくれるよう招いた。1914年、陳子褒は『嶺南学生報』の序の冒頭に次のような言葉を残している。「新しい中国を欲するならば、死んでない人の心（未死之人心）を育てる必要がある。死んでない人の心を育てることを欲するならば、学校による必要がある。死んでない人は何者ぞ、それは少年である」、「故に死んでない人の心を育てる為には、新しい教育の学校によるべきである」等。嶺南大学の国文教育は、基本的には子褒学校を卒業した優秀者によって主宰された。以上のような背景もあり、陳子褒の蔵書の多くは、家族から嶺南大学（後に中山大学と合併）に寄贈されている。

### 3. 『人生地理学』（中国語版）の所蔵者

#### （1）河南留学欧美預備学校

『人生地理学』（1909年）：河南大学図書館所蔵。同書には「河南留学欧美

預備学校」という印が押されていた。同学校は1912年に、外国語を教授して青年や学生を欧米に派遣し留学させることを目的として、河南省教育界の進歩的人士によって創立された。当初は英語のクラスを2つ開設し、それぞれ60名を定員とした。4年制の学校で、卒業後に優秀者には欧米留学の公費が提供され、それ以外の者には卒業証書を与え、各学校に教師として派遣することにした。その後、清華留美預備学校（清華大学の前身）の影響を受け、第1期生の定員に変動があり同年9月に新生140名を受け入れた。このようにして遅れた内陸の中原に、新式の学校が誕生した。更にその後、清華留美預備学校を手本にして4年制から5年制に改編した。なお同学校は、英語の他にフランス語、ドイツ語のクラスも増設している。卒業生は派遣留学の試験を受けるのであるが、1917年に卒業した第1期生の中から20名が、河南省政府からアメリカへの派遣留学の資格を与えられている。

同学校は1923年に中州大学に改編されるが、それまでの12年間で662名を受け入れた。その内、アメリカ、フランス、ドイツ、ベルギー、日本等に留学した者は91名、国内の各大学に入学した者は143名であった。なお留学した者の中から例えば、中国の衛星の父・趙九章、建築大師・楊廷宝、水利の泰斗・閻振興、地学の権威・張伯声等の人物を輩出している。

中州大学は1930年には省立河南大学に改編され、1949年新中国建国後には何度かの学院学部の改編を経て、1984年に河南大学として復活し、2000年には新しい河南大学として組織改革がなされている。<sup>(6)</sup>

#### 4. 『人生地理学』（日本語版）の所蔵者

##### （1）両江法政学堂

『人生地理学』（日本語版1906年）：南京大学図書館所蔵。表表紙の裏に押された印から、「両江法政学堂」が所蔵していたことが判明した。同学堂は、



法律や政治関係の人材を養成する高等機関で、1908年南京に創設された。

清朝政府は教育改革をすすめるにあたり、教員養成とならんで重視したのが現職官吏の再教育であった。1902年、京師大学堂を再開し、師範館と並べて仕学館を開設した。仕学館は巖谷孫蔵（京都帝国大学法科教授）と杉栄三郎（会計検査院検査官補）を迎えて開学、学生は現職官吏あるいは候補官吏の中から試験により100名を選抜し入学させた。学科目は帝国大学法科大学のそれに準じ、修業年限は3か年であった。その後、法政教育の機関として「進士館」が新設され、仕学館の役割を引き継いだ。1905年に科举制度が廃止になり、進士館は自然廃校のかたちとなるため、1906年に進士館を改組して「京師法政学堂」が発足した。この学堂は仕学館や進士館の目的、即ち官吏の補習教育とは異なり、行政官の本格的養成をその目的とした。<sup>(7)</sup>

「两江法政学堂」もこの改組の中で発足した。同学堂が設立された1908年には、甘肅法政学堂、広西法政学堂、河南法政学堂、奉天法政学堂が設立されている。<sup>(8)</sup> 同学堂の正科の学生定員は100名で、その内20名は蘇州から、60名は南京から、安徽省、江西省からは各10名ずつで、また正科以外に別科（100名）も設置された。なお場所は南京の旧仕学館に置かれた。正科および別科の科目であるが、同学堂のものに関しては資料の関係で詳細は目下不明であるので、他の法政学堂の例を参考として明示する。

正科の科目に関して：法政学堂の中で、最も早く設立されたのが「直隸法政学堂」（1904年）であった。日本人教員を招いていた。正科に設置された科目は、大清律例、政治学、憲法、行政法、刑法、民法、商法、国際公法、国際私法、刑事訴訟法、民事訴訟法、財政学等である。その後、多くの法政学堂が発立されるが、その模範となったと言われる。<sup>(8)</sup>

別科の科目に関して：「京師法政学堂章程」の規定によると、別科には人倫道德、大清律例、政治学、法学通論、憲法、民法、刑法、商法、国際公法、倫理学、歴史、地理、算術、日本語等の科目が設置されていた。<sup>(9)</sup>

## (2) 胡小石

『人生地理学』（日本語版1906年）：南京大学図書館所蔵。表表紙の裏に押された印から、古代文字学者・胡小石の蔵書であったことが判明した（同一の書籍に両江法政学堂と胡小石の印が押されていたことになる）。胡小石（1888-1962、南京出身<sup>(10)</sup>）は、1909年両江優級師範学堂の農業博物学科を卒業し、北京女子高等師範学校、武昌高等師範学校、金陵大学、東南大学、中央大学等で中文系の教授、主任、更に文学院院長等の職を歴任した。1949年以降は、南京大学教授兼文学院院長、図書館館長を務めた。長きにわたり、古代文字の音韻訓故、経書、史籍、諸子百家、仏典道藏、金石書画の研究および教学に精通し造詣が深い。

胡小石は、北京女子高等師範学校で教授兼国文部の主任をしていた時（1920年）に、李大釗と知り合い意気投合し、しばしば李大釗の家を訪ね閑談をしている。胡小石は、学生の程俊英に「(李大釗)は愛国愛民の学者で、一晚中、机に向かい文章を書き、マルクスが理想とする共産主義で中国を救い、世界が大同の世となるよう努めている。私は彼が好きだし、彼を尊敬している。彼は良き友人である」と述べている。ある時、胡小石は李大釗と共に、北京の大学の教員学生が起こした“索薪（給料催促）運動”にも参加している。

中央大学で教鞭をとっていた頃の1947年5月、中央大学の学生が率先して“反内戦、反飢餓、反迫害”の闘争を起こした。胡小石は、進歩的な学生の愛国運動に同情し支持をした。学生には、慎重に策を練るよう注意喚起を与え、自身は記者会見等を通して、社会の世論の支持を得ようとした。国民党の当局は、学生運動を弾圧し、“五・二〇”事件を引き起こした。胡小石は、他の中央大学の教員と共に公開の声明を発表し、当局の措置に抗議し、逮捕された学生の救助に奔走した。

1949年初め、行政院が“国立院学校応変計画”を出し、中央大学を広州或

いは厦門或いは台湾に強制的に移そうとした際、中央大学の教員は一斉に反対し、“中央大学維持会”を組織し、胡小石はその常務委員を務めた。同年4月、南京が解放され、その後中央大学は南京大学に改名し、胡小石は校務委員会の委員に任命され、文学院院长も兼任することになった。

胡小石は学生を愛し、講義の合間に彼らを招き、しばしば南京城内の老舗に行き、食事をし、またお茶を味わった。彼は“美食家”として、“飲食文化”を重視し高く評価し、さらに弟子や友人らと酒を味わい、詩を作った。彼の口癖は“生涯に3つのいいことがある。一つは学問、二つは詩を作り揮毫すること、三つ目は東坡肉”である。彼が創作した料理、それを人々は“胡先生の豆腐”と称し、今日でも“金陵菜譜（献立集）”の中に記載されている。

## 5. むすびに

1903年に『人生地理学』が世に問われて、また同時に中国人留学生によって中国語に翻訳されて以来約100年が経とうとしていた2000年に、2人の中国人研究者が同書の中国への影響について、ある研究成果の中で言及した。一人は鄒振環で『晚清西方地理学在中国——以1815至1911年西方地理学訳著的傳播与影響为中心』（上海古籍出版社2000年4月210-211p）の中で、もう一人は郭双林で『西潮激蕩下的晚清地理学』（北京大学出版社2000年5月218p）の中で触れている。

特に後者は、『人生地理学』の中国に対する影響を、次の2つの視点から述べている。1つは、同書が論述した郷土地理教育の理論と方法が、中国の郷土地理教育にもたらした影響である。もう1つは、同書が論述した国家と個人の関係が、中国社会に民主思想の学説を伝播する上で大きな役割を果たしたという点である。

前者の視点は、徐家滙天主堂蔵書樓が、中華文化の保存の為また宣教師が布教する為に、地方志の収蔵に力を入れていたこととも関連すると思われる。徐宗沢は、地方志は特殊な価値を有し、研究する必要性を説いているので、『人生地理学』の論述した郷土地理教育の理論と方法に注目したのではなかろうか。

後者の視点は、両江法政学堂に関連すると思われる。法律や政治関係の人材を養成する教育機関には、『人生地理学』は特に必要性の高い内容の書籍である。更に別科に設置されていた科目、即ち「地理」「日本語」等から考えると、同書の需要はかなり高かったと考えてよいだろう。また進歩的な当時の知識人でもある胡小石や陳子褒に、西洋の新しい思想や学説を十分に提供したものと考えられる。

以上2つの視点以外からも、中国への影響は見られる。それは地理学への影響である。章厥生が編集した『歴史地理大辞典』が一つの例であろう。章厥生は『人生地理学』をかなり精読しているのである。陳子褒は、婦女や児童にも中国を含めた地理の知識の必要性を感じ『婦孺中国与地略』を著わしているが、『人生地理学』はそれに十分、応えたものと考えられる。さらに『人生地理学』が提供した西洋諸国の地理学の知識が、中国社会に対し世界的視野の拡大をもたらしたという視点も重要である。これは河南留学歐美預備学校で、収蔵されていたこととも関連すると思われる。ヨーロッパやアメリカに留学する青年に、世界的視野を提供していたのであろう。鄒振環著『晚清西方地理学在中国』の中で、『人生地理学』は“近代西洋の地理学思想と知識体系”の中国への輸入に、大きな役割を果たしたとある。

#### 注

- (1) 拙著「牧口常三郎著『人生地理学』中国語版に関する一考察」『創価教育研究』創刊号2002年3月18p

- (2) <http://www.douban.com/review/1421249/>
- (3) 章嶽『歴史地理大辞典』台北新文豊出版1974年10月、台湾版では書名に中華が付されている。
- (4) 拙著「牧口常三郎著『人生地理学』中国語版に関する一考察」前掲18-19p
- (5) 王蕾「創新教育、交相呼応——『人生地理学』源及的21世紀初日中教育改革」の負うことが多い。同文章は、2007年11月、中山大学代表团が本学を表敬訪問した際、『最新人生地理学』の複製版を本学に贈呈された折、資料として付されていたものである。大変に学術的価値の高い内容である。王齊榮、鐘峪石「陳子褒和港澳婦孺教育」「教育史研究」第3期1999年9月93-95p、謝長法「陳子褒的教育觀簡述」「教育評論」第3期1994年60p
- (6) <http://club.kf.cn/forum>. <http://tieba.baidu.com/p/218685148>
- (7) 阿部洋『中国の近代教育と明治日本』福村出版1990年8月176-178p
- (8) 肖宗志「晚清新政時期官員的教育培訓及其作用」「史学集刊」2007年3月第2期4-5p
- (9) 阿部洋『中国の近代教育と明治日本』前掲179p
- (10) <http://www.newsmth.net/nForum/>